

日本語学習アドバイジング—その深さと大切さ—

奥田純子（コミュニケーション学院）

【講演】

1. はじめに

【スライド1】

みなさん、はじめまして。奥田でございます。今日は、院生の方に話をさせていただくということで参りました。院生の方は、どれくらいいらっしゃるのでしょうか。（院生が会場にある程度いることを確認し）安心いたしました。（会場 笑）院生の方々に学習アドバイジングがどういうものかをご紹介したいと思って、準備をしてきましたので、よろしくお願いします。最後に、少し質疑の時間を取っていただいていますので、足りないところなどきいていただければと思います。

今日のテーマは、日本語学習アドバイジング「その深さと大切さ」ということですが、そもそもどうして私が学習アドバイジングに興味を持ったかというところから、話を始めたいと思います。

2. 私と学習アドバイジングの関わり

【スライド2】

さきほど、ご紹介いただきましたように、私は神戸にありますコミュニケーション学院という日本語の教育機関で学生たちと日本語を勉強しています。1990年代の終わりぐらいから、私どもも含め、多くの日本語学校で、学生が変わってきたなあと感じるようになりました。いわゆる多様化が起きていたんですね。一般的に多様化は、学習者の、例えば、属性とか、来日目的とか、第一言語などが多様になることですが、みんな留学生ですから、属性が多様化したわけではありません。今まであまり「そういう動機では来なかったんじゃないか」という人たちが増えてきたということなんです。皆さんは、2000年からフランスで始まった JAPAN EXPO、ご存じですか。知っているって方、いらっしゃいますか。（手を挙げた人が少ないことを確認し）有名じゃないんですか、日本では（笑）。ヨーロッパで、というか、今、世界で一番、日本という名前が呼ばれるのは、この JAPAN EXPO で、何十万人という人がやってきます。欧州の COOL JAPAN のはしりで、7人ほどのフランスの日本大好きな若い人たちが始めた文化博覧会ですが、こういった COOL JAPAN 現象を背景に、アニメとか、漫画などのポップカルチャーが大好きな学生たちがヨーロッパを中心に増えてきました。それに加えて、もちろん、アジアの諸国でもピカチュウとかドラえもんは有名ですし、ドラえもんは中国のものだと信じて疑わないでやってくる留学生もでてきました。そういう世代の人たちが、日本のポップカルチャー・ブームを背景にある種の日本ファンとなって 2000 年の前ぐらいから来るようになりました。

もう一つの変化は、中国です。この中に中国の留学生の人はいますか。(挙手した人を確認し) はい、中国では、みなさんもお存じだと思いますけれども、1980年代には、大学などの高等教育に進学できる人が3%以下でした。それが、様々な改革開放政策によって、2002年ごろには中国の高等教育は大衆化段階、つまり、進学率が15%以上になって、多くの人たちが大学に行けるようになりました。そして、高等教育を受けることが、沿岸部を中心に当たり前になってきて、高等教育を受けるためにやってくる中国の人たちもどんどん増えてきました。そして、一方でヨーロッパや、北米を中心に、日本のポップカルチャー大好きな日本ファンの人たちに加えて、両親が「とにかく留学しなさい」というから来ましたといったアジアの人たちも来るようになって、日本語教育機関の中での多様化が進んでいきました。それまではどうだったかと言いますと、とにかく進学して、日本の大学でディグリーを取って帰るというモデルです。その当時は、日本で卒業後に就職はできませんから、自分の国に帰って、勉強してきたことを活かす、それが日本の留学生政策でもありましたから、卒業後は、みんな国に帰って、その学位をもって国に貢献するということが、留学の前提としてありました。ところが、この頃からそういう留学形態は崩れ始めていて、本人の意志とは関係なく、「両親が言うからちょっと行こうかな」という留学や、「日本面白そうだし、行ってみようかな。じゃあ、ちょっと日本語勉強しようかな」というような人たちも増えてきたわけです。一応「大学に進学します」と言って、入学してくるんですが、「じゃ、どんな勉強がしたいの」とか「どこで学びたいの。最終的にどんな仕事に就きたいの」ときいても、「先生はどこがいいと思いますか。先生決めてください」という具合ですから、「どんな人生を送りたいのか」とか、「どうなりたいのか?」ときいても、「先生が教えてくれるんじゃないですか?」とか、「いやー、あんまり考えてませんでした。なんとなく来ました」という返事が返ってきたりするわけです。隣の街に買い物に行く、そんな感じの留学ですね。本人たちは、ある意味ハッピーなんですけれども、ところが、学習というところから見ると、ただこうやって手を出して待っているというか、指示待ち症候群のように、「はい、すべきことを乗せてください」と待っている。そして、言われたことは勉強する。学校で先生がいろんなことをやってくれるのに乗っていけば、日本語も上手になって、いろんなこともできるようになるだろうというような風潮と言いますか、よく言われるやる気があるんだろうかという疑問がわくような学生もでてきたわけです。もちろん、やる気があるものすごくある学生もいます。はっきり人生の設計図を持ってやって来る人ももちろんいて、そういった人たちから「やる気」にクエスチョンがつくような人、そういう幅をもった言わばやる気をめぐる多様化が、90年代の終わりぐらいから日本語教育機関に、はっきりとした形で見えるようになりました。

私どもの学校でも、やはり同じようなことが起きていました。コミュニカ学院の学生の国籍は、中国(大陸)の人たちが三割ぐらいで、それ以外は、いろんなところから来ていますが、その比率はどんどん中国が低くなって、その他の地域が高くなってきて、そして、

同時に様々な動機が混在するということが加速していきました。つまり、やる気がどうも疑わしいという学生も混ざってきたということです。「やる気ある？」ときくと、一応「はい」とは言うんですけど、見ている限り言動が合わない。それで、「どうしたものかと、いろいろ考えていたんですけども、内発的な動機づけに課題があるんじゃないかと思うようになりました。内発的動機づけに関しては、自己決定論という大きな理論があって、その中に様々な小さな理論があるんですが、その中で言われていることの一つに、内発的動機づけが十分に発動する条件は、Deci という人が少なくとも三つあると言っています。一つは自律性ということ、それから自己効力感。これは、自分は有能で何かをやったらできるという、自信みたいなものです。それから、人との関係。他者からも認められ、サポートを受けられるというようなことです。この三つの条件がそろった場合に、内発的動機づけが十分発動されると考えられています。つまり、この内発的動機づけの三つの条件のどれかが何らかの形で上手く機能していない。それが機能すると、内発的動機づけが発動されて、つまり、それはやる気ってことになるわけですが、モチベーションが上がっていく。ですから、内発的な動機づけを考えていく必要があるんじゃないかということ、2000年ぐらいから考えるようになりました。では、どうしようかということですが、私たち教員は、何が仕事かという、賢い学習者を育てることだと思えます。賢い学習者というのは、何事も自分で決めて、学んでいける存在。教師がいなくても、自分で学んでいける存在。そういう存在を育てることが日本語教育機関としての大きなミッションだと思っています。ですから、そういう意味では、内発的動機づけを十分に考慮した教育を考えていかないと、だめなんじゃないかなと思いはじめたわけです。ことばを換えれば、学習者オートノミーということですが、自律性ですね。自律性というものを育てていく。そのことをやっていかないと、こういった状況は変えていけないということが、私どもの学校の中であったということです。学習者オートノミーは、非常に抽象的な能力ですから、「その能力が具体的にどんなふうに行使されるのか？」という実際の姿として、自己主導型学習、つまり、「学習者オートノミーを持っている人の活動形態として、どのような形態があるのか」、「それが行使されるときの状態はどういうものか」を考えると、自己主導型学習ができるということだろうと思いますし、自己主導型学習ができるということは、学習者オートノミーを持っていると考えられます。ですから、先のような状況を変えていこうと思うと、学習者オートノミーというものを育成すること、言い換えれば、自己主導型学習ができるように、あるいは、できるような仕掛けを学内に創っていくということが、私たちの機関での一つの教育の課題になりました。当時は、まだアドバイジングという発想は出てきていませんでしたが、自己主導型学習をなんとか学校の中に取り込めないだろうか、という問題意識が始まりであったということです。

3. 自己主導型学習と言語学習アドバイジング

【スライド3】

自己主導型学習は、どんなものかということなんですが、「聞いたことがない」という方、いらっしゃいますか。(挙手している人数を確認し) 大体みなさん、ご存じですよ。こちらの図は、自己主導型学習のサイクルを表したものです。自己主導型学習ではまず、目標を設定します。日本語を勉強するのであれば、日本語をなぜ勉強するのかという目標ですね。次に、その目標が達成されるような計画を立てます。そして、立てた計画を実行して、目標が達成されたかどうかを評価する。こういう一連の、いわゆる PDCA のサイクルを自分でマネジメントしながらやっていくのが、自己主導型の学習です。ですから、こういう学習、つまり、学習者オートノミーを行使した学習ということですが、こういう学習を学習者が自分でできるようにしようということです。

このプロセスは、学生が自分でやるんですが、なかなか一人ではすぐにはうまくできないので、いろんなところに介入していく必要があります。例えば、長期目標を立てるところでは、「自分の一生として、こういう人生を送っていきたい」とか、あるいは「こんな職業について、こうなりたい」とか、そういう長期の目的、目標の設定のときや、中期目標「長期目標の達成のためには、10年後ぐらいには、どうなっていたらいいのか?」とか、「中期目標にいくためには、短期、大体、二、三か月、あるいは一か月ではどうなっていたらいいか」というような目標の設定のところで介入するということがあります。それから、計画立てるときに、「どういうふうに勉強するのか」とか、どんな手段でやるのか、つまり、どんなリソースを使うのかということです。そして、実際にリソースを選んだとします。例えば、問題集でもいいし、絵カードでもいいし、あるいは Web 上の何かのソフトでもいいんですが、それを選んだあとに、「では、それを実際に、いつ、どんなふうな使い方をして、どのぐらいの時間やるのか」、そういう具体的な学習のシナリオ、これを組み立てて、つまり計画を立てます。この計画を立てるところにも、最初は介入が必要です。ほっといても、自分ですぐにできるわけではありません。もちろん、できる人もいますが、なかなかすぐにできるわけではありません。それから、ここの評価ですね。この評価は、事前に目標を設定したり、計画を立てたりするとき、「目標を達成しているかどうか」を、「どんな方法で」あるいは「どういうやり方をしたら、それができたと言えるのか」ということも最初に、決めておきます。そして、それ(評価方法)を決めた上で、実行していきます。もし、問題があれば、新しい目標を再設定したり、学習方法を変えたりしてもいいわけで、その場合もこの学習サイクルでやっていきます。

そして、これらを自分でマネジメントしていきます。自分がやっていることをモニターしたり、たぶん一番重要なことは、ここだと思えるんですけども、自分でやっていることを内省してみる。教師から「こうなってるよ」と言われるのではなくて、自分で自分の学習をもう一回、振り返ってみる。つまり、メタ認知です。また、情動面の管理も大切で、途中で嫌になるとか、一生懸命やっているけど成果が挙がらないとか、上手くいっている

のかどうかもわからないとか、様々な学習上の困難や苦しいことがでできます。そういった感情を管理する。こういうマネージメントもサポートする必要があります。こういう自己主導型の学習サイクルを学習者一人ひとりが自分でできるようになる。自分でできるようになるように助けていく。それが学習アドバイジングということになります。少し言い方を換えますと、自己決定による学習。つまり、自分で計画を立てて、マネージメントしながら、実行、評価をして、そしてまた次の目標を立てる、とこういうサイクルを全部自分で決定して、やっていく。こういった学習をコントロールする能力を、先のような学習を通じて、作っていく、このプロセスをたどることで学習者オートノミーと言われる、自分で自分の学習をコントロールする能力につながっていくと思います。こういう能力がある人は、自己主導型学習ができるわけですが、すぐにみんなできるわけではないので、このプロセスに介入する必要があると、その営みが、言語学習アドバイジングということで、自己主導型学習とアドバイジングは、そういう関係にあると思います。ですから、最終的には、学習者による学習者自身の学習のコントロールを可能にすることが目的で、そういう能力をつけるためのサポートが学習のアドバイジングだということになります。

4. 学習アドバイジング・・・？

【スライド4】

言語学習のアドバイジングについて、「学習者中心の教授法ですか」という質問がよくあります。これはそうではありません。教授法ではありませんから、学習者中心の教授法でも、もちろんありません。それから、学習者のニーズ、学習者自身がこんなふうに学びたいと思っているやり方、それに基づいた教授活動でもありません。では、教師はいらないのかということになりますが、学習者自身が、先ほど話した自己主導型の学習サイクルが回せるようになったら、教師はほとんど必要がないんですが、重要な役割が残ります。ですから、教師が全くいなくなるというわけではありません。最初は、相当必要です。最もよくある質問は、「学習アドバイジングは、アドバイザーと二人でいっしょにやるから、個別学習なんですね」というものですが、個別指導ではありません。最も私が重要だと思っているのは、これです。ことばを教えることではないということです。つまり、いわゆる教授活動ではないということです。ここには、院生はもちろん、先生方もいらっしゃるわけですが、言語教育をしていらっしゃる先生や、あるいは、地域でいえば、学習支援者と呼ばれる人たち、この人たちは、日本語を教えることを仕事なり、あるいはボランティア活動として関わっていらっしゃるわけですが、少なくともアドバイジングということでは発想の転換をしてもらわなければいけません。日々やっている、教えるということは、アドバイジングではやりません。それが、一番大重要なことだと、思います。上手に日本語を教える先生になりたいと思っている人や、教えるのが大好きという人は、ちょっと時間がかかるかもしれないと時々思いことがあります。それは、日本語を教えるこ

とではないからです。

5. 学習アドバイジングの目的

【スライド5】

では、アドバイザーは何をするのかということですが、最初にお見せしました PDCA サイクルの自己主導型を学習者が自分でできるようになるためのサポートです。学習アドバイジングの目的ら言えば、言語を教えることではないということが大前提にして、学習者が言語と言語の学び方を学ぶことを助けること。つまり、さっきお見せしたサイクルを自分で作っていきけるようにすることが最も大きな目的です。

そのために、学習者による学習のコントロールを可能にするような活動だとか、構造だとか、体制、これらを裏方として作ることが必要です。

つまり、学習者が学習方法の知識や技能を広げること助けることです。先生が学習者はこういうふうに学習をしたら、日本語の学習が上手くいく。だから、こういう授業活動をしましょう、というように教師が学習を組み立てるのではなくて、学習者自身が自分に最もあった方法に関する知識を増やして、自らが学習を組み立てられるようにすることです。学習者開発と言ったほうが分かりやすいかと思いますが、学習者が学習の方法や、技能を広げることがアドバイジングの目的です。

それから、自己主導型学習を教えるのではなくて、彼らがそれを進められるように、ファシリテイトしていく、促進していくこともそうです。

もちろん、アドバイジングは学習者にアドバイスするわけですが、この学習に関するアドバイスは、よくある日常のアドバイスということとは、意味が違います。例えば、「ちょっとこの頃、友達との関係が上手くいってないんだけど、どうしたらいいと思う」と聞かれたら、皆さんだったら、どんなふうに答えられるでしょうか。「食事にでも誘って、正直に話してみたら」とか、あるいは「こんなふうにしたらいんじゃない」というようなことを、お話になるんじゃないでしょうか。日常のアドバイスは、具体的な「こうしたらいよ」とか、「私はだいたいこんなふうにしてる」というようなことを言うと思うんですが、アドバイジングではそういうことは、言いません。またあとで話しますが、日常のアドバイスではないということです。

それから、学習者が自分の学習について、話ができるようになることです。例えば、「漢字の意味はわかるけど、すぐ読み方が思い出せない」とか。自分の今、やっている学習について、教師が話すのではなくて、学習者が自分で、話ができるようにすること。言い方を換えると、自分の学習について、自分が一番のプロである、よく知っているという学習者になってもらうことです。

それから、学習者が直接リソースにアクセスできるようになることです。先生が「こんなものがあるよ」とか「こんなものどうですか」とか、最初はそうかもしれませんが、だ

んだん自分に合うリソースを探して、それにアクセスできる。そうなるように助けていくこともアドバイジングの目的です。

そして、これは目的ではないんですけれども、アドバイザーが絶対やってはいけないと思う三原則は、教えない、決めない、評価しないです。大阪大学の青木先生は、教えない、評価しないとおっしゃっていますが、決めない、を加えてこの3つです。教える、決める、評価するは、教師の三種の神器みたいなもので、教師は教えて、決めて、評価するということを日常的にやっていると思いますが、その三つをやらないことが、アドバイジングの基本的な三つの要素かなと思います。ですから、そういう意味ではアドバイザーのことは、すごく重要です。一般的に教師は、「〇〇さん、じゃあ、次はこれしてください」とか、あるいは「じゃあ、これはもういいですよ。次は、練習しましょう。はい、よくできました。では、次、行きましょう」ということを、日常的に教室の中で言っているわけですが、そういうことを言わないわけです。さっきのサイクルを作ろうとしても、上手く計画を作れなかったり、上手くいかなかったりします。そのときにどうしても教師は、「こうしたらいいよ」といった日常のアドバイスをしがちです。「アルバイトがしたいんだったら、面接の練習をしましょう」とか「本はこういうのがあります」とか「1日に何分ぐらい、このやりとりをやったらいいですよ。ペアになってやってみましょう」みたいなことが教師側から出てくるわけですけど、そういうことではなくて、例えば、「アルバイトしたいと思ってる。でも、なかなかアルバイトへ行っても、面接がうまくできない。だから、アルバイトのときの面接が上手くいく方法を知りたい」という学習者がいたとしたら、「じゃ、そのためには、こうしたらいいと思いますか」「面接で上手くいくような日本語を話せるようになるには、何をしたらいいと思いますか」ということをきいていきます。一つ目の質問です。すると、「ああでもない、こうでもない」と学習者は、いろんなことを考えます。そのことをよく聴くことが二つ目の傾聴です。学習者の考えの中には、「うん、なるほど」もあれば「ん？」というの、いろいろあります。けれども、その中で彼らが考えていることや「こうしたらどうかなあ」と思っているアイデアについて、「なるほどね」という承認をする。つまり、教師としては、「ん？」と思っても、まずこれでトライしてみようと思うことについて、あまりにもはずれていなければ、そのことを認めて、「じゃあ、やってみますか」と背中を押して、励ます。ですから、普段教師がやっていることとは、全然違う方向のことをやるのがアドバイジングということです。

6. 学習アドバイザーの役割

【スライド6】

では、以上のことをアドバイザーの役割からまとめてみます。いろいろな考え方があろうと思いますが、この五つかなと思います。

一つは、最初から何度も言っている、学習者が言語と言語学習に関する知識、つまり、

本人が言語と言語学習というものに関する知識を見つけたり、新たに書き換えたり、あるいは、新しいものを獲得したりすることを手伝うことです。時々、学生が「私、本当に日本人の友達をたくさん作って、日本語で話をしたい。だから、今、日本語能力試験の3級の問題集をやっています」とか「たくさん話したいので、今、たくさん漢字を覚えています」「聴けるようになるために、辞書を見てます」とか、「うーん、それはできるようになりたいことと直接関係あるのかな？」と思うようなことを言います。もしその学生が、自分の言語学習に関して、そう考えているとしたら、それは少し書き換えをする必要があります。あるいは、新たなやり方を獲得することが必要かもしれません。そういうときに、新たに学習の方法を見つけたり、気づいたりできるように助けていくことが必要です。助けるということばの意味するところは、一つはまず本人にそのことを質問していくことです。「たくさん話したいんですね。そのために、問題集を見るんですね。見ることと、話すこととはどういうふうに関係していますか」とか。その人の中では、なにかしらつながっているはずなんだろうがそこが合理的かどうかということについて、考えてもらうことです。また、アドバイザーは、必要なら言語学習に関する専門家としての知識を与えることも役割の一つです。例えば、漢字学習なら、形と、読み方と、意味、このワンパックをわかる必要があるということなどです。こういう様々な言語学習の専門家としての知識も、学習者の状況に応じて提示することが必要です。ただし、こうしなさいということではないです。専門家としての知識を提示することによって、彼らが「じゃあ、こんなふうに学習をしていこう」ということを発見したり、学習を創っていけるようなサポートです。アドバイジングは個別指導のように、何も一対一でなくてもできるわけで、私どもは、クラス学習ですから、クラスの中で、例えば、記憶するというなら、たくさんの記憶の仕方がありますから、それぞれみんなが持っているやり方をクラスの中で、どんなふうに行っているのかを学習者どうしでアイデアを出し合います。壁にポストイットに書いて貼って行って、「これいいな」と思ったものを自由にためすということもします。その場合、学習者どうしは、アドバイザーではありませんが、そういったクラス全体をファシリテイトしながら、アドバイジングをしていくこともできます。ほかの人がやっている方法も、もちろん参考になりますから、様々な言語学習に対する知識を更新したり、獲得したり、あるいは書き直したりすることが可能になります。

それから、学習のサイクルになんらかの形で介入していくことです。例えば、初めて日本語を勉強する人が、「私は一か月後に日経新聞を、そのまま、辞書も使わずに読めるようになりたい」という目標を立てたとします。ある程度頑張ったらできるだろうなあという範囲ならいいけれども、学習者が非漢字系なら、そうとう難しかりょうと思います。ある程度のチャレンジはいいんですけど、あまりにもかけ離れているときには、やはり介入が必要です。「いや、それは無理ですよ」と言うのではなくて、例えば、その人が一番得意な言語がスペイン語だとして、「あなたは、スペイン語を全然知らない人が初めてスペイン語を

勉強して、一ヶ月で新聞を何も見ないで読めるようになると思うか」とか、そういうふう
に、いろんなところから自分の学習について、考えられるように、質問をし、自分の学習
に関することばを引き出していく、それが学習サイクルの手助けということです。

それから、学習環境を整えることは、非常に大切な仕事だと思います。一つは、リソース
の準備です。リソースは教材だけではないわけで、人もそうだし、今は Web、インターネ
ットでいろんなものを使えるわけですから、そういったものも含めて、整備するというこ
とです。言語学習用ではないけれど、例えば、お知らせやチラシとか、パンフレットなど
も全部学習のリソースになりえます。こういったリソースを「これだったらこんなふう
に使える」とか、「このリソースはこういう利点がある」というようなことも提供できよう
に準備します。また、特定の学習の目的・目標、例えば、聴くことを伸ばしたいのか、書
くことなのか、話すことなのか、この特定の学習目標にそったリソースを作っていくこ
ともそうです。例えば、「語彙の学習用」とか「聞き取りの改善用」とかです。初級の教科書
の多くは、総合型になっていますので、一つの教科書の中に聴くことも入っていれば、話
すこともあるというようにいろんなことが入っています。そういう総合型のものではなく
て、ピンポイントで特定の学習目標に使えるようなものです。そして、それらのリソース
を管理することが必要です。

前に、アドバイザーは、自己主導型の学習ができる人にはいらぬのかということがあ
りましたが、ある部分だけはいると言ったのは、学習環境の整備・デザインのことです、こ
の役割は残るだろうと思います。最初は、アドバイザーがすることがものすごく多くて、
学習者が考えたりしたりすることは少しかもしれません。けれども、だんだん学習者に能
力がつくと、ほとんどは学習者が自分で目標を設定して、計画を立てて、実行して、そし
て、評価して、このサイクルは回っていきます。回っていくと、アドバイジングという行
為は、どんどんいらなくなっていくます。アドバイザーのところによって来る頻度がへる
わけです。ただ、例えば、「こういう学習をこんなやり方でこうやりたいんだけど、そのた
めに一番びったりなリソースはありますか」というときに提供できるようにしておくこ
とが理想的なんじゃないかなと思います。ですから、アドバイザーが必要ないのではなく
て、アドバイザーに対する期待が、変化する、言い換えれば自己主導型の学習がきちん
とできる学習者になったということだと思いたしますが、それでも、学習環境の整備は、や
はりなくならないだろうと思います。

そしてあとは、学習ストラテジーの紹介です。学習ストラテジーを教えると、自己主
導型学習になるような気がしますけど、実は、そうではなくて、必要なときだけ、本人がど
うしても考えあぐねたときのオプションとして出すことです。ですから、それまでは自分
で考える。あるいは友達どうしていろんなアイディアを考える。それでも、上手いかな
かったときにオプションとして提案します。私は、大阪大学の青木直子先生に、アドバイ
ジングについていろいろ教えてもらったり、一緒にいろんなことをさせていただいている

んですけれども、彼女が言っているのは、オプションは一つだったら、「これやりなさい」になってしまう、二つだったら、「どっちにしようかな」となる。でも、三つだったら、よく考える。四つだったら、多すぎて迷う。だから、三つがいい。私もそうじゃないかなと思います。学習者がいろんなことをやってもなかなか成果が出なかったり、上手くいかないというときだけ、ストラテジーを紹介するといいいと思います。そういう意味では、コースの紹介も同じで、オプションとして出すのは、三つぐらいが適当だろうと思います。やはり一つだと「やりなさい」になってしまいますから。いずれにせよ、学習ストラテジーの紹介も、必要なときにだけ行います。

そして、最後に、これはアドバイザーの仕事かどうかは、いろいろ議論はあるでしょうが、ステークホルダー、つまり、関係者に対して、説明したり、説得したり、理解してもらったり、協力を要請したりすることです。例えば、「日本の友達と話したい」とか、大学院の学生が議論が上手になるために、「同じゼミの院生といろいろ話をしたい」というようなことがあります。ある意味、日本語の練習台になってもらいたいと思っているわけですが、相手がそのつもりで付き合ってくれないと、なかなかうまくいかないわけです。それに、会話をしながら、日本語を覚えたい人は、会話の相手になってくれる人が、普通のただ日本語を話せる人だけであってはうまくいかないわけで、その人がきちんと学習者の日本語が発達するようなやりとりをしてくれる相手でないと、日本語力が伸びません。院生であれば、ゼミの先生やほかの院生が会話の相手に、それも日本語の発達を支援する相手になってくれるように、関係者に協力をお願いしていくことも、アドバイザーの役割だろうと思います。

7. 学習アドバイザーに必要な知識とスキル

【スライド7】

では、このような役割をこなすためには、学習アドバイザーにどんな知識やスキルが必要かということですが、少なくとも、アドバイジングそのものについての知識がまず必要です。

それから、言語学習についての知識です。私のように教師という立場にいと、どうしても言語教育を考えてしまいます。つまり、教授とか、教えるということですが、そうではなくて、学習・学習過程ということについての知識です。日本語教師がアドバイザーをするかしないかは別にして、日本語教師としてやっていくにしても、最も重要なことは、私たち自身が言語学習に関する専門的な知識をより多く獲得すること、そして、それをわかりやすく、学習者が使える形で提示できるようにすることが、この中では一番重要なことだと思います。

あとは、オートノミーについての知識と、学習ファシリテーションについての知識です。スキルとしては、こういうことかと思っています。例えば、学習者が自分の言語学習について、

内省したり、考えたりできるような良い質問をするスキルです。学生と話していると、「日本語の語彙、これだけ覚えました」とか、要するに、言語習得がどれくらい進んだかの話を学習者はよくします。そのことも大事ですけど、その言語習得の裏にあるプロセスやメカニズムについて、話ができるような質問をする技術です。言い換えると、学習者が自分の言語学習過程をモニターしたり、内省できるような質問のスキルです。

それから、「教えない、決めない、評価しない」とことと関係しますが、アドバイザーが「それだったら、上手いきませんよ」というような判断をしない、保留するということです。「毎日 100 個日本語の語彙を覚えます。そしたら、10 日で 1000 になる。そして、30 日だと 30000 になって、日本語能力試験にあつという間に通る」、そういう理屈の学生がいます。確かに記憶力が抜群によかったりするんですけど、「覚えても、使えるのか」とつい教師は思うわけですが、そのことの適否をすぐに判断しない。つまり、やってみたらわかるわけです。やっていく中で本人は気づいていく。だから、こちらが判断しなくても、学生自身が判断できるような状況を作っていけばいいので、まず、判断を保留することは、とても大切だと思います。

次は、とにかく「話を聴く」ことです。質問をしたときに、学習者は考えています。そのときに、アドバイザーが次々にしゃべってはならないということです。本人は一生懸命考えていて、ある程度のレベルになると、日本語で話そうといろいろ考えをめぐらしています。教師は沈黙が怖いので、ついなにか言ってしまうたりするわけです。そこはぐっところえて、彼らの口火が切られるまで、黙っていること、沈黙を怖がらずに黙っていることです。これはなかなか教師には、大変です。

それから、さっき言った学習の選択肢、オプションをできるだけたくさん持っているということです。

次の、「原因を説明する」というのは、言語学習に関する様々な側面を説明するスキルです。例えば、上手く覚えられないと言う人には、「脳はどういうふうに記憶している（と考えられている）のか」とか、聞き取りの苦手な人に、背景知識と聞き取りの関係を話すとか、読んで意味は分かるけれど使えないという漢字系の学習者には「少なくとも、漢字は三つのスペックを知る必要がある」など、言語学習について専門家として、専門知識を与えるということです。

それから「言葉を見つける」というのは、その人が一生懸命言おうとして、言えない一言、自分の学習について、ぴったりすることばを一言だけ、提示することです。

【スライド 8、9】

それから、さほど言った学習環境を創造するスキルです。多くはリソースの整備だと思いますが、使いやすいリソースを作ったり、使いやすいように配置したり技能です。（【スライド 8】の写真を示しながら）これはリソースセンターの棚の写真です。それぞれのリソースの背表紙の上と下に、（【スライド 9】の写真を示しながら）こんなステッカーがつ

けてあります。上のほうは、言語で、赤は中国語で書いてありますということで、黄色は韓国語で書かれていますということをさしています。下のステッカーは、どんなことが学べるかで、話すこと、聴くことや、漢字、「試験対策用」など、種類が分かるようになっています。

【スライド 10】

(【スライド 10】の写真を示しながら) これは、自分の計画を立てるための言語別のシートなどが、この中に入っています。

8. 道具：日本語の学習計画と評価

【スライド 11】

学習アドバイジングには、道具プラス環境が必要です。環境というのは、さっき言ったリソースなどです。そして、もう一つは、自己主導型学習を上手く回すための道具です。これは、その道具の一例ですが、日本語の学習計画表です。実物は A4 の縦長のシートになっています。

名前の下のところにまず「いつ始めて、いつ終わるようにする」かを書きます。これは、短期目標型ですけれども、最初に言いましたように、長期、中期の目標がきちんと書かれた上で、これを使うということになります。例えば、長期目標は「本国の日系企業に就職して、技術関係の SE になりたい。そして、将来は、SE の会社を作りたい」、中期目標としては、「まず、〇〇大学の大学院に入る」があって、そのためには、短期目標として、この一、二か月で何ができるようになればいいかをここに書きます。そして、学習シナリオとして、どんなふうに関係を使って、どこで、どれぐらい勉強するのか、いつまでに達成するのかを決めます。情動面、感情的で上手くいかなかったときは、どうするのか、例えば、友達に愚痴を聞いてもらおうとか、友達を誘いこむとか、いろんな方法があると思うんですが、そういうこともここに書いておきます。そして、評価です。どうしたらできるようになったかがわかるか。これがなかなか難しいんです。「先生にテストしてもらいます」というのが一番多いパターンですが、自分で評価できる方法を考えてもらい、「できるようになったか」を評価してもらいます。評価は、本人がやるんですが、そのときに、この二つ（成果の評価とプロセスの評価）をやります。成果として、例えば、「漢字の語彙を 100 個覚える」だとしたら、まず、それが達成されたのか。星の数でいうと、五つ星でなん星ぐらいだったかです。「完璧にできた」から「まったくだめ」まで。三つ目というのは、真ん中、ですね。もう一つ、学内では、プロセスの評価をしてもらっています。何かというと、「計画通りにいったのか」ということです。計画通りにやらなくても、できる場合がありますし、計画通りにできなかったから、達成しなかったということもあれば、計画に無理があった場合もあるわけですから。星をつけたあと「その根拠は何か?」を書きます。ここが、自分の言語学習の内省になるところで、一番重要なポイントです。そのほか、「学

習は楽しかったか」「発見したことは何か？」を記入します。これは、自分の学習に関する気づきを意識化するために書きます。そして、これが終わると、「次は何を勉強したいか？」「どういうふうやっていくのか？」を決めます。そのときは、中期目標を見ながら、短期目標をまた作っていくというサイクルを回わしていきます。もし可能なら、学習のダイアリーを毎日書いてもらうといいと思います。

【スライド 12、13】

中期、短期目標ですけど、なかなか決めにくいこともあります。これは（【スライド 12】）JF スタンダード¹ですが、留学生の場合、国際交流基金のみんなの「Can-do」サイト²などを参考にしたらいいと思います。ご存じない方、いらっしゃいますか？みなさん、ご存じですね。（【スライド 13】を示しながら）この中に入ると、Can-do が出てきます。その中に CEFR、ヨーロッパ共通参照枠というがあるので、ここをクリックして、レベルを指定すると、Can-do がぱーっと出てきます。これは（実物を提示）本校で編集しなおしたのですが、聞くこと、書くこと別に編集しなおしてあります。これは B1 レベルの聞くことですが、こういう Can-do リストを使って、短期目標を考えていくということもできます。慣れてくれば、自分で「こんなことしたい」という具体的な目標が出てきますけれども、こういう Can-do リストを使って、目標を作っていくことも、留学生なら、可能だと思います。

9. まとめ

私は学習アドバイジングは、ある意味で教師を育てるものだと思います。学習アドバイジングを教師が学ぶことは、言語教育そのものをよくすることになるんじゃないかと思えます。ただ、向く人と向かない人があるという気もします。同様に、学習アドバイジングを受けながら、自己主導型の学習をするのが、得意な学習者もいれば、そうでない学習者もいます。今までの経験から言えば、国籍はあまり関係がないと思いますが、向き不向き、好き嫌いはあると感じます。けれども、少なくとも、教師が今までのようになんでもかんでも、教えること、決めること、評価することを全部やっていたのでは、やはり学習者の言語学習力を伸長することは、なかなか難しいだろうと思います。学習アドバイジングの何が優れているかというと、学ぶのは学習者であって、先生でないという精神です。アドバイジングによって（学習者を）自分の学習に関するプロにするということこそが、私は教師の仕事であると思います。そういう意味では、学習アドバイジングは、ただ、学習のストラテジーを教えるとか、リソースを作ることだけではなくて、私たち自身も言語学習に関する専門的な知識、教授ではなくて学習についての専門的知識を本当にたくさん学ん

¹ JF 日本語教育スタンダード <http://jfstandard.jp/top/ja/render.do>

² みんなの「Can-do」サイト <http://jfstandard.jp/cando/top/ja/render.do>

でいかないといけないと思います。そのことは、言語学習をする本人が言語学習の専門家として、自律していく道を開いていくことになるだろうと考えるからです。いい質問をするというのは、本当に難しいです。けれども、学習者がいきいきと自分なりに学んでいく姿を見ると、「本当にすごいなあ」、「人間ってすごいなあ」と実感します。みんながそういう意味では、オートノミーの元を持っているし、内発的な動機も持っていることがよくわかります。みんなそれぞれ有能だなあということが、ひしひしと感じられます。ですから、そういう学生を見ていると、私たち自身が学習アドバイジングを学んでいく意味は、学習者にとっても、私たちにとっても、最終的には言語教育そのものにとっても、実は大きな意味を持っているんじゃないかと考えております。

早口で話してしまい、すみませんでした。以上でございます。どうもご清聴ありがとうございます。ありがとうございました。

【質疑応答】

質問者：非常にわかりやすいお話をしていただいて、ありがとうございました。私はアドバイジングということを実践したことがないので、誤解があるかもわからないんですけども、確認させていただきたいのは、教授者とアドバイザーというのは、実質的には一人の人がそれぞれの役目を担っているということ、一人の教師がアドバイザーでもあり、教授者でもあるということと理解しているんですけども、それはよろしいでしょうか。

奥田：ええ。一人の人が、あるときはアドバイザーになり、あるときは教授者であってもいいと思いますが、少なくとも、今はアドバイザーとして関わっているのか、あるいは、教授者として関わっているのかという、今の立場を学習者ときちんと確認しておく必要があると思います。ごちゃごちゃにならないほうがいいと思います。

質問者：今は、ということは、私がおききしようと思ったのは、その続きがありまして、教えることと助けることが区別されているというのは、今のでよくわかったんですけども、一人の人間が教授者であり、アドバイザーであるというのは、教えないっていうことを実現しながら、アドバイザーとして成り立つのかなという、どちらかという、教えるっていうことも含まれて、アドバイジングというのが成り立ってしまうとか、そういうふうになりがちなのではないかなというふうに思って、今、質問させていただきました。だから、教えるという行為とアドバイジングという行為は、そのときはということで、分けて考えるということでしょうか。

奥田：はい。そういうことです。

質問者：わかりました。ありがとうございます。